

SEANET 2006 大阪開催決まる

JA3AA 島伊三治

SEANET2004は11月19日から21日までバンコクで開催されました。JA3AER、JA3USA、JE3BEQご夫妻のアイハウスラジオクラブメンバーにJA3QUU、JA4HCK等日本からの参加者は20名を超えていました。

私がバンコクを訪れたのは22年振りでしたが、道路が良くなり高層建築物が増え、地下鉄が走っているのをまの



あたりにして都市の変貌に目を見張りました。最終日の11月21日午前の会議で2006年の開催地には、大阪に決まったことをご報告致します。

2006年の大阪開催については、JA3AER荒川さんのプレゼンテーションがあり、大きな拍手でこれが認められました。これで第36回SEANET CONVENTIONの大阪開催が正式に決まりました。よく考えてみますと、日本において個人レベルでの国際的なアマチュア無線の会合は、1993年に大阪国際交流センターで開催された国際YLミーティング以外に例を見ません。当然SEANETも初めての日本開催となり、そのホスト役は当クラブであります。各国の方々に大阪へ来て良かったと思って頂けるよう力を合わせて準備にかかりましょう。



SEANET convention 2004 in Bangkok



一枚の写真から

JA3AER 荒川 泰蔵

英国に駐在中、しばしばスコットランドに出かけました。免許は居住地がウエールズですからGWORTAのコールサインが割り当てられているが、スコットランドに移動して運用する時はそのプリフェックスGWをGMに変更するのです。この見晴らしのよい写真は1997年にスコットランドのノース・ウイスト (North Uist) 島で運用するためにホテルの裏庭にアンテナ (R7) をセットアップしたところ。この島はスコットランドの北西に位置し、ヘブリデス諸島 (The Hebrides) の一つです。このツアーでは、車にアンテナ (R7) とトランシーバー (IC-760PRO) を積んで、オーバン港からフェリーでバラ (Barra) 島に渡り、そこで運用の後、北上してサウス・ウイスト (South Uist) 島、そしてノー

ス・ウイスト (North Uist) 島にたどり着いたのです。観光地でもないこんな僻地に足をのばした日本人は少ないのではないのでしょうか。これらのヘブリデス諸島のIOTA番号はEU-010でスコットランド本土のEU-005とは区別されているため、運用するとすぐパイルになった。またGM-DX Groupが発行するスコットランドの島のアワードIOSA (Islands Of Scotland Award) では、それぞれの島に別々の番号が割り振られており、どの島から出ても、このアワードを狙う人達に良く呼ばれた。帰途はスカイ島 (Isle of Skye) までフェリーで渡り、それでも1泊しての運用でEU-008をサービスしたが、このスカイ島へは本土から最近になって橋ができたため、観光客は容易に行く事ができるようになったようだ。

GMORTA/Pの巻



ベランダアンテナ調整報告

HFV5 14MHz

運用可能帯域拡大実験

JA3VWT 中野幸紀

報告概要

ベランダアンテナ HFV5(エレメント長約 150cm × 2)の先端部につく 14MHz ローディングコイルを左右各 1 本追加し、2 本 2 対とした場合に運用可能周波数帯域を通常の約 2 倍(約 100kHz)に拡大可能であること、左のみ 2 本とした場合、帯域を通常の約 1.5 倍(約 75kHz)に拡大可能であること、及び、その際、送受信性能にはほとんど改善がなかったことなどを報告している。

運用結果は、送受信性能の改善が見られなかったため、海外 QSO には向かないが、運用可能周波数帯域が拡大することによってローカル QSO に最適なアンテナとなったことを報告する。

1. 実験目的

高短縮率マルチバンド・トップローディング V 型ダイポールアンテナ(HFV5)の 14MHz 用ローディングコイルを左右各 2 本(通常は左右各 1 本)使用することによって、同型アンテナの 14MHz 帯域における運用可能周波数帯域の変化を観察する¹⁾。同時に、給電点をベランダ内側 40cm から外側 40cm に突き出した時のアンテナの送受信性能変化などを観察する。

2. 実験方法

(1) 実験対象アンテナ及びその他機材

(イ) アンテナ

Diamond 社製マルチバンド V 型短縮ダイポールアンテナ(商品名:HFV5(7, 14, 21, 28 and 50 MHz 用))を実験対象アンテナとした。

中央部の分厚いアルミ板上にバラがネジ止めされており、そこから左右約 130 度に約 105cm の長さの堅牢なアルミ棒が出ている。アルミ棒の先端にアルミ製のネジうけ台があり、そこに最大で 7,14,21,28,50MHz の 5 本のローディングコイルをネジ止めすることができる。7MHz のローディングコイルを使用せず、14MHz、21MHz 及び 28MHz のローディングコイルだけを取り付けた場合のエレメント長は片側約 150cm となる。回転半径は約 2.5m 程度とみられ、非常にコンパクトで軽量である。

(ロ) アンテナ支柱

アンテナを取り付ける支柱として、高さ 190cm の物干竿用逆 J 字型鉄製支柱(断面は 2.5cm 正四角形)をそのまま用いた。支柱はベランダ外柵の中央部分に設置されている

(ハ) 伸縮ポール

給電点を前後に移動させるため、写真撮影用 1 脚をアンテナ支柱奥部に U 字ボルト 3 本で固定した。1 脚はアルミ製の 3 段伸縮式、Velbon UP4000 である。この機材はその断面が台形となっており、ねじれ応力に強いだけでなく支柱上部に U 字ボルトで締め付けて固定しても外形が變形しない²⁾。U 字ボルトで確実にアンテナ支柱に固定できなければならないという必須条件を満たすものはこの他になかった。

(2) 測定機

KURANISHI Instrument 社製の BR200 Standing Wave Analyzer(アンテナアナライザ)を用いた。

(3) 実験場所

JA3VWT 局常置場所の 14 階建てマンション 11 階(地上高約 30m)部分の居室南側ベランダを実験場所とした。

ベランダ空間は、幅 566cm、奥行 142cm 及び高さ 256cm である。

HFV5 アンテナを取り付けるためのスライド可能伸縮ポール(1 脚)は、ベランダのほぼ中央(東端から 276cm の位置)の高さ 190cm の物干竿用逆 J 字型鉄製ポール(断面は 2.5cm 正四角形)上部にベランダ外側に向けて取り付けた。ベランダ柵は高さ 142cm のアルミ製枠組に亚克力製と思いき目隠しが設置されたものである。したがって、給電点は、ベランダ柵上端アルミ手すりから約 50cm 上方、ベランダ天井から約 66cm 下方のほぼベランダ中央の空中にあることとなる。

なお、アンテナ給電点直下のベランダ柵下部にアルミ網線でアースをとった。

(4) 実験内容

実験は、次の 2 実験とし、それぞれ実験条件を以下の 3 段階に設定した。

(イ) 14MHz ローディングコイルの追加実験

(運用帯域拡大)

(ロ) 給電点の前後移動実験(送受信性能評価)

それぞれの実験について設定した実験条件は、

(イ) ローディングコイルの追加については、追加エレメントなし(標準状態)、左エレメントに 1 本追加及び左右エレメントにそれぞれ 1 本ずつ追加の 3 条件とし、(ロ) 給電点の移動については、ベランダ柵内側 40cm(標準状態)、0cm 及び外側 40cm の 3 条件とした。

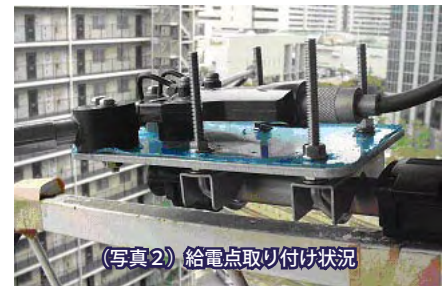
3. 実験準備及びアンテナ設置結果

(1) アンテナ設置状況

ベランダ柵中央部分に固定された逆 J 字型物干竿用鉄製ポールの上部にアンテナ伸縮用ポール(写真撮影用 1 脚(写真 1))を固定し、その先端部に HFV5 のバラ台(アルミ製)を付属のマス取付金具でナット止めた(写真 2)。

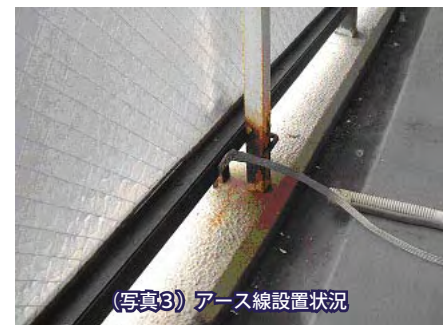
伸縮用ポールは、第 1 段を伸展した場合に、給電点がちょうどベランダ柵の真上に来る(すなわち給電点 0cm の位置)ように調整して設置した。こうすることで第 1 段及び第 2 段の両方を縮めた場合(収納時)には、給電点がベランダ内側 40cm となり、大風に強く安全性が高まる。また、第 1 段と第 2 段を伸展した場合には給電点がベランダ外側 40cm の空中となる。

アンテナ同調点及び SWR 最小点調整は、伸縮ポールを収納した状態(給電点内側 40cm)で行った。こうすることで、同調点調整用のタブがベランダ内で調整可能となり、作業の安全性が確保できる。地上 30m のベランダでの作業であるので、その内側で調整作業ができることがベランダアンテナ設置工事として重要な要件となる。



(2) アース点の確保

JP3AZA 河田さんに月例会で教えていただいたとおり、アンテナ直下ベランダアルミ柵の下部にアース・ポイントを設置した。4 ミリねじ穴を 3 個開け、幅 1.5 センチ長さ 3 メートルの平網線をねじ止めた。これを部屋の下部換気口からアンテナ同軸線といっしょに室内に入れ、トランシーバにねじ止めし、メインアースとした(写真 3)。これによってアンテナアナライザ測定時の SWR 最良点とトランシーバ運用時の SWR 最良点がずれる現象がほとんど見られなくなった。



(3) 同調点調整用タブ長さの調整及びその結果

運用中心周波数 14.160MHz 付近において SWR がもっとも小さくなるようローディングコイル先端部にある同調点調整用タブ長を調整した。HFV5 の構造上、各運用バンドのローディングコイルが左右エレメント先端部のアルミ製ネジうけ台に一ヶ所に集中的に取り付けられており、同調点は他バンドのローディングコイル調整用タブを動かすことでごくわずかだけ変化する(実用上は大きな支障のない程度の変動だと思われるが、ここではかなり厳密に調整したので各バンドの調整後に再度他バンドの同調点確認とタブ長再調整を行った。)

調整は、低いバンド、すなわち 14MHz バンドからはじめ、21MHz、28MHz バンドへと移動する順番で行った。14MHz バンドでの同調点 SWR が 2 以下になってくると他バンドの調整はほとんど不要となる。この結果、他バンドの同調点は 14MHz よりも先に仮決定できた。

(イ) 同調点調整用タブ長測定結果

最初に、HFV5 の左右両エレメントに 14, 21, 28MHz の 3 エレメントをそれぞれ 1 本ずつ取り付けた標準状態で運用周波数 14.160MHz、21.250MHz 及び 28.350MHz でのタブ長さを決定した。

SWR が最小になるよう調整した後のタブ長は、表 1 に示すとおり、それぞれの周波数で、14MHz エレメント長が左右とも 42mm、21MHz エレメント長が左、129mm、右 183mm、28MHz エレメント長が左、85mm、右 118mm であった。このときの SWR は、14MHz で 1.03、21MHz で 1.1、28MHz で 1.2

となった。

(b) 14MHz ローディングコイルを左右各1本追加した場合

次に、HFV5に左右それぞれ14MHz ローディングコイルを2本及び21、28MHzのローディングコイルを1本ずつ取り付け付けた状態(片エレメントで4エレメント取り付け状態)で同調調整用タブ長さを決定した。

14MHz ローディングコイルが左右2本ずつ同じものがあるため、それらの位置関係が90度以上の相対角度で交差するように取り付け付けた。その結果、中央部分(エレメント延長方向)に21MHz、上下に14MHz、手前に28MHzという相対配置となった(写真4)。



14MHzの調整を詳細に行う前に、21MHz及び28MHzのタブ長をSWRがそれぞれ最小となるよう仮決定した。その結果、SWRが21MHz 1.12及び28MHz 1.35の時に、21MHzタブ長が左67mm、右136mm、28MHzタブ長が左67mm、右91mmとなった。いずれも14MHzローディングコイルが左右1本であった標準時に比べて大幅に短くなった。つまり14MHzローディングコイルの追加で21及び28MHzのエレメント同調点が下がった。このことから、ローディングコイルの追加によってアンテナエレメント全体のインダクタンス分が増加したと考えられる。

次に、14MHz左右各2本、合計4本の同調調整用タブをカットアンドトライで最小のSWRが得られるよう調整した。その方法は、まず、左側2本のタブ長をもっとも短くした状態(2.8cm)に固定し、右側2本の同調調整用タブのうち、上タブ長を固定した状態で下タブを順次調整し、同調点を14.160MHzに近づけ、その変化がとまったところ(短縮しても同調点が動かなくなるところ)で、再度下側のタブ長を調整し、その調整によって同調点が移動しなくなる点で左側エレメントのタブ長を少しだけ調整する(1mm単位で伸ばす)という手法であった。これを2-3回繰り返すことで、最小点(SWR=1.0)が得られた。その時の14MHzタブ長は、右側下タブ長69mm、右側上タブ長68mm、左側上31mm左下27mmであった。

(ロ) 14MHz ローディングコイルを左1本追加した場合

最後に、HFV5の右側ローディングコイル2本のうち1本を外し、左側2本、右側1本として、再度タブ長を調整・決定した。その結果、14MHzタブ長は左上下とも42mm、右(1本)50mmとなった。この時の21MHzのタブ長はそれぞれ左133mm、右181mm、28MHzのタブ長は左83mm、右122mmとなった。

調整タブ長さ測定結果 (SWR)		
(unit:mm)		
周波数	左エレメント	右エレメント
14MHz	42	42
21MHz	129	183
28MHz	85	118
14MHz	上	42
	下	42
21MHz	133	181
28MHz	83	122
14MHz	上	36
	下	33
21MHz	67	136
28MHz	67	91

表1 ローディングコイル同調調整結果

4. 14MHz SWR 測定結果

(イ) 14MHz ローディングコイル左右1本(1+1)取り付け時(標準)

図1に示すとおり、ローディングコイル左右それぞれ1本使用時には、SWR<2.0の帯域幅は50kHz強であった。

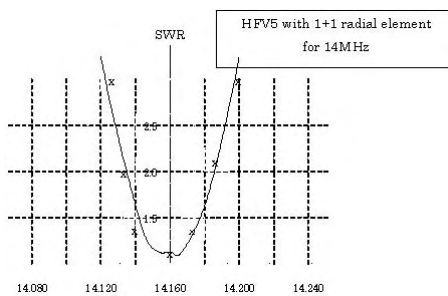


図1 14MHz ローディングコイル 1+1 本取り付け時の SWR 変化測定結果

(ロ) 14MHz ローディングコイル 2+2 本取り付け時

図2に示すとおり、ローディングコイル2本使用時には、SWR<2.0の帯域幅が100kHz弱と1本時のほぼ2倍となった。

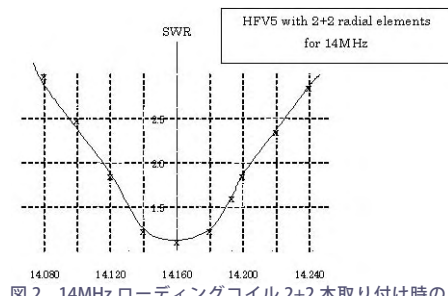


図2 14MHz ローディングコイル 2+2 本取り付け時の SWR 変化測定結果

(ハ) 14MHz ローディングコイル 2+1 本取り付け時

図3に示すとおり、ローディングコイル左2本、右1本使用時には、SWR<2.0の帯域幅が75kHz弱と標準時と2本取り付け時のほぼ中間となった。

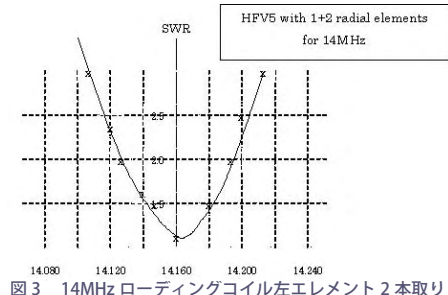
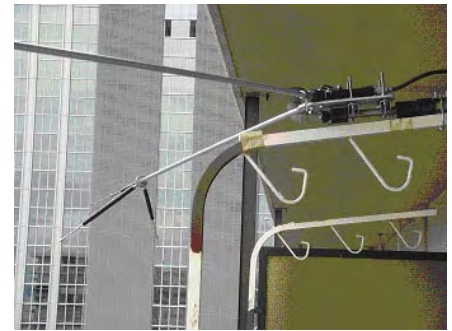


図3 14MHz ローディングコイル左エレメント 2本取り付け時の SWR 変化測定結果

5. 給電点の移動

ペランダ柵手すり端直上を0cmとする。その内側に40cmの位置をマイナス40cm(伸縮ポール(1脚)を完全収納した位置:写真5)を標準設置点とした。



(写真5) 給電点ペランダ内側(アンテナ収納位置)



(写真6) 給電点ペランダ手すり柵直上(通常運用時)



(写真7) 給電点ペランダ外側(40cm伸張、コンテスト時)

この時、各給電点でSWRが最小となる点を仮に同調点(f_0)とすれば、 f_0 は給電点をペランダ外側に移動させると数十kHz上方に移動する。移動幅は周波数帯によって異なり、以下の報告(1)-(3)のとおりとなった。カッコ内の数値は測定時のSWR値である。

(1) 14MHz

14MHzではペランダ内側(伸縮ポール収納時、ペランダ端からマイナス-40cm)で、 $f_0=14.147(1.01)$ 、ペランダ柵直上(通常運用時、ペランダ端直上0cm)で $f_0=14.165(1.05)$ 、ペランダ外側(伸縮ポール伸張時、ペランダ端から外側へ+40cm)で、 $f_0=14.177(1.08)$ となった。給電点がペランダ内側から外側に移動するとそれぞれ18kHz、12kHzだけ同調点に変化しており、ペランダ柵などのアンテナ周りの影響がかなり大きいことをうかがわせる結果となっている。この時の運用可能帯域(SWR<2.0)は約100kHzのまま変化なかった。

(2) 21MHz

21MHzでは収納時(-40cm)で $f_0=21.222(1.10)$ 、ペランダ柵直上(0cm)で $f_0=21.250(1.15)$ 、ペランダ外側(+40cm)で、 $f_0=21.249(1.30)$ となった。給電点がペランダ内側からペランダ柵直上に移動することで同調周波数が29kHz変化し

ており、給電点への建物などの影響が大きいく
 がうかがえるが、さらに給電点を外側に出し
 てもその同調点はほとんど変化しておらず、単
 に SWR が増大している。この時の運用可能帯
 域 (SWR<2.0) は約 200kHz のまま変化なかった。

(3) 28MHz

28MHz では標準点で $f_0=28.302(1.22)$ 、ペラン
 ダ柵直上 (0cm) で $f_0=28.328(1.10)$ 、ペランダ
 外側 (+40cm) で、 $f_0=28.337(1.20)$ となった。
 約 80cm の給電点の移動で同調点が 35kHz し
 か移動していないことは、ペランダ柵の影響を
 受けにくい周波数であることをうかがわせる。
 この時の運用可能帯域 (SWR<2.0) は約 400kHz
 のまま変化なかった。

なお、降雨時にはアンテナエレメント全体に
 雨滴が多数付着するため同調点は 14MHz で約
 40kHz 下がり、21MHz でも 20kHz ほど低下す
 ることが観察されている。

6. 実験結果総括と運用結果

以上の実験結果から、14MHz 帯域では短縮率の
 大きい Diamond 社製の V 型ダイポールアンテナ
 (HFV5) に 14MHz ローディングコイルを 4 本 (左
 右それぞれ 2 本ずつ) 取り付けることで、運用可能
 な帯域幅が約 2 倍 (100kHz) に、ローディングコ
 イルを 3 本 (左 2 本、右 1 本) 取り付けることで帯域
 が約 1.5 倍 (75kHz) に拡大できることがわかった。
 また、給電点をペランダ内側から外側空中に移動す
 ることで同調点が数十 kHz 高くなることがわかった。
 その際に SWR<2.0 の運用可能帯域も平行して
 移動するがその帯域幅はほとんど変化しない。その
 結果、アンテナをペランダから 40cm 突き出した
 状態でも 14MHz における運用可能帯域を 100kHz
 確保することができた。

ペランダ外側に給電点がある場合と内側にある場合
 (80cm の差) では、14MHz の地上見通し距離の通
 信で送受信とも S で 1-2 の違いがある (JE3BEQ 局
 の協力による。)

しかし、14MHz における SSB コンテスト運用結
 果は惨憺たるものである。使用リグは YAESU FT-
 1000MP (出力 50w) である。

2004 年 7 月 11 日 (コンテスト時) にアンテナ標
 準状態 (追加ローディングコイルなし) でマレーシ
 ア 9M6A とコンタクトできた (相手信号は 56)。こ
 れが標準状態 (給電点がペランダ外柵直上位置) で
 の唯一の交信実績である。

その後、14MHz ローディングコイルを 4 本とした
 状態で約 1 週間運用した結果は、2004 年 9 月 24

日と 25 日に沖縄局とコンタクトできただけであ
 った。海外局との交信はできなかった。

最後に、ローディングコイル 3 本 (左 2 本、右 1 本)
 で DX コンテストに参加した。2004 年 10 月 2 日
 と 3 日のオセアニアコンテストでは海外 QSO として
 初めて Z01ALZ と交信 (受信強度 58)、11 月 13
 日からの Japan International DX Contest Phone で
 は YB0A (受信強度 58)、Z01ALZ (受信強度 58)、
 JT1CJ (受信強度 53) などとナンバー交換できた。
 しかし、相手局の信号が明瞭に (信号強度 51 以上)
 聞こえていてもこちらからの電波はぎりぎり届か
 ず、交信成立にいたらなかったものが数件あった。
 ローディングコイル左右 1 対の標準状態では運用
 可能周波数帯域が 50kHz と狭いため、ほとんど運
 用に耐えないことから考えれば、ローディングコ
 イル 4 本または 3 本で運用可能帯域を拡大しておく
 ことは魅力的である。しかし、4 本ではどうもダミ
 ーロード的な感じ (SWR は低い電波がアンテナから
 出て行かない。) であるため、今後はローディング
 コイル 3 本装着状態で運用する。

いずれにしても、エレメント長 150cm 程度のペ
 ランダ設置短縮アンテナ (給電点外側最大 40cm) で
 は、短縮率の大きい 14MHz 帯域では海外局との
 QSO は困難であると見られ、毎週土曜日開催の
 J13ZAG ロールコール及び国内局とのラグチューに
 最適なアンテナであると評価できる³⁾。

このように HFV5 全体としての性能には大いに満
 足しているため、なんとか今後も 14MHz における
 性能改善の試みを継続して行きたいと考えていると
 ころである。

*1 実験開始当初は、同一バンド内の異なる周波数に同
 調させたローディングコイルを 2 本使用すること
 で、例えば、CW 用とフォーン用の 2 つの周波数帯
 域の利用が可能になるのではないかと期待したが、
 結果的には、Diamond 社のサポートから示唆のあ
 ったとおり、同調周波数を 2 つに分けることはできず、
 同一同調周波数点においてその利用帯域幅が拡大
 (広帯域化) すると結果が得られたものである。

*2 断面が丸型の一脚では U 字ボルトで外側からきつく
 支柱に固定すると断面がゆがみ、内側のボールがス
 ライドできなくなることがある。

*3 なお、このアンテナも短縮率が緩和される 21MHz
 では、コンテスト時においてもペランダの地上高
 30m を武器に、ほぼ満足できる性能を発揮してい
 る (フィンランド、アルゼンチン、ネヴァダ、オー
 ストラリア、インドネシアなどと交信)

思い出の写真

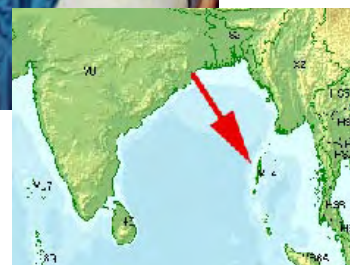
JA3UB 三好二郎

来年はアマチュア無線の免許を取得して 50 年
 目を迎えるので写真や 8 ミリフィルムの
 整理をしつつある。

今から 20 年前の 1984 年にはアマチュア無線
 を禁止している国やアクティビティの低い国も
 多く、中国も北京、上海、成都に各 1 局そして
 私達が援助して福州開局したばかりの
 ものを合わせて全土にたった 4 局、しかも中国
 からのローバンドや 50 メガ、そして特殊
 モードによる運用はボクが初めてとあって DX
 コンベンション等に顔を出すすよくもてたもの
 であった。

1984 年 11 月ペナン島で開催されたコンベン
 ションでインドの若手 DXer として名を馳せて
 いた VU2RBI バラティと DX 談義をした時の赤
 茶けた写真が出てきたので披露させていただく。
 彼女はインド首相で熱心なアマチュア無線家だ
 った故ラシブ・ガンジーとも親交があって通
 常許可されない地域からアマチュア無線の運用
 をしたりアクティブであったがその後結婚して
 から消息が途絶えていた。

この 10 月ソウルで開催された世界 YL ミーティ
 ングにインドから参加した VU2SWS サラに消息
 を訊ねたところ最近活発に活動をしているとの
 ことであった。そしてバラティから来たメール
 には「私のところへは YL ミーティングの案内
 その他の便りがさっぱりなかった。ところで 12
 月に通常アマチュア無線が許可されないアン
 ダマン島から電波をだすよ」と書かれていた。



Dr. Ken との再会

JE3BEQ 宮本

昨年マレーシアのジョホール・バルで行われた SEANET コンベンションで、初対面の Dr.Ken(9M2KN) から一杯飲もうと声をかけられホテルのバーで飲むのかと思いきや、深夜近く一時間ぐらいい車で見知らぬところに連れて行かれ、人気のない産婦人科病院の手術室に入れられたり、御殿のような家の大理石の居間で薄明かりの中酒を飲んだスリリングな話しは、一年前のニューズレターで紹介した。

島さん (JA3AA)、馬場さん (JA4HCK)、私と家内は一日早くバンコックに到着した。その晩夕食も済ませて、いよいよ明日 Seaneter 達が集まってくるのだなあと家内と二人ロビーでくつろいでいたところ、ふと横を見ると Roy (DU9/G4UNL) と Ken がそこにいるではないか、文字通り感激の再会となった。Grand dinner(メインパーティー)では夫々の国の伝統的な服装で余興を楽しむ人が多いが、今回参加するに当たって Roy から何度もトラディショナルな服装をと on the air で所望されていた。しかし俄仕立てでは絵にならないと欠礼し、その代わりにもし余興が回ってきたら坂本九の The stars of looking up night と Sukiyaki を皆で歌えるように、念のためバイリンガルの歌詞とカラオケテープを用意しておいた。案の定直前になって荒川さん (JA3AER) から、今回は誰も余興の準備をしていないので宮本さんにやって欲しいとお鉢が回ってきた。早速日本の皆さんに舞台上上がってもらおうと共に皆と一緒に歌おうと声を掛けたら、Ken が真っ先に舞台上がってくれてテノールの美声で盛り上がった。例によってこのパーティーは延々と続き夜中を過ぎてやっと終わった。Ken からパーティーが終わったら部屋でまた飲もうと、前日から日本の人を連れてくるようにと誘われていた。しかし遅い時



Ken と Hans と私

間であったので残念だが又の機会にと別れ際に挨拶すると、彼は残念そうに「僕は何時でも歓迎する」と言った。部屋に戻ってデジカメのバックアップやバッテリーの充電等後片付けをしているときに、ふと先ほどの Ken の残念そうな顔が浮かんだ。そして無性に会いたくなり、家内が事前にコンビニで買って置いてくれた紙カップを持って彼の部屋に走った。彼の部屋は廊下の一番奥まったところであり扉は開けっ放しであった。後で思ったが彼は皆がきて夜でも話しができるように、この部屋を取っていたように思う。中に入るとパジャマに着替えてくつろぐ Ken を囲んで、Gary (VK8GW) と彼の奥さん、Hans (DF5UG)、Chen (BA1HAM) らが話しをしていた。そして彼は好きなものを飲むようにと目で合図をした。彼と一年前に飲んだとき、ウイスキーはシングルモルトに限ると一致したものだ。し

かし彼の家ではないしテーブルの上にはジョニーウオーカーがあったので独酌で注ごうとすると、離れたところから彼が何か言った。すぐには何を言われているのか分からなかったが、テーブルの青い筒が目に入って彼がそれを飲むように言っているのに気付いた。一年前に彼の家でご馳走になったあのスモーキーな香りのするシングルモルトであった。まだ封を切つてなく一瞬躊躇したが彼に促されて注いだ。それはまさしく懐かしいあの香りであった。そ



Gary の奥さんと西間さん

してこの上等の酒をあたかも自分が持ってきたかのように、勝手に皆に注いだ。Ken はそれを満足そうに見ていた。このとき先ほど到着しそのまま別れたばかりの Mac(JA3USA) と西間さん (JA3QUU) のことを思い出し、深夜 1 時を過ぎようとしていたが電話で二人を呼び出した。パーティーの司会で大活躍した Thida (HS1ASC) や世話役の HS の若者達もきて部屋は満員になったが、家内の用意した紙カップが役に立ち全員が酒を飲みながら楽しいひと時を過ごした。またこのとき Ken のターバンの秘密を知った。彼は 007 のショーコンネリーに勝るとも



HS の世話役達と Mac

劣らないハンサムでダンディーなナイスガイであるが、何とも言えない人柄に強く魅かれるのは私だけではないと思う。今回彼を一つだけ不愉快にさせたことがある。それは「来年のバンガロールで行われる Seanet に来るか?」と念を押されて、メイビーと答えたときであった。余り好き勝手ばかりしていると家内に離婚されると言ったら、家内のところに行つて何か話していた。家内も内緒! と何も言わない。来年バンガロールで再会するのが楽しみである。

大阪国際交流センターラジオクラブ

JI3ZAG

Web: <http://ja3.net/ihouse>

ロールコール

毎週土曜日 9:00JST@14.160MHz

月例会

大阪国際交流センター
毎月第 2 金曜日

SEANET 2004 Snap shots

